

いわかづみ

令和七年三月 第百号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(19)
- ◇ 民具が語る生活史(民具②③ハコフイゴ)
- ◇ 方言一考(かづける)
- ◇ 坂井初雪の水墨画
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(19)

峠を越えた人たち⑩

旅の始まりは、吹雪の諏訪峠から

渡辺伸栄

孫三郎一行、七十七日間の旅

万延元(一八六〇)年といえば、幕末である。

三月に桜田門外の変が起きた。二年前には安政の大獄で吉田松陰が死罪になり、三年後には新選組が結成されている。八年後には、幕府そのものが潰れてしまう。

騒然としていたであろうこの時代、上関宿の

孫三郎はお伊勢参りの旅に出た。一行五人、四十二才の孫三郎を筆頭に、下関宿の孫六二十七才、又作二十四才、上関宿の治郎兵衛四十五才、半兵衛三十四才。

出発は十一月十九日。会津、日光、江戸、名古屋、伊勢神宮、奈良、吉野、高野山、大阪、金毘羅、神戸、京都、石山寺、馬籠、善光寺と、古刹古社名所旧跡をくまなく回り、万延二年二月六日、無事上関宿に戻った。

病氣一つせず、歩き通した七十七日。頑強な健脚ぶりには、恐れ入るしかない。

孫三郎の残した旅日記には、意外なことに、幕末の騒然とした様子は見られない。唯一それらしい記事は、前年に開港したばかりの横浜の見物で、アメリカ、オランダ、イギリス、フランス、中国の屋敷地や交易場を珍しそうに見ていることくらい。

一般庶民にとっては、現代の我々が思うほどには騒然としていたわけではないのかもしれない。旅の治安は保たれ、まだまだ、泰平の江戸時代は続いていたように見える。

最初の峠越えは、会津街道諏訪峠

出発して四日目の十一月二十二日、一行は行地(東蒲原郡阿賀町・旧三川村)の宿屋山本屋に泊まり、翌二十三日、諏訪峠を越えようとした。

これから始まる長い長い旅の最初の峠が、この諏訪峠である。村上や新発田の殿様の参勤交代の道であるから、整備行き届いた峠道であつたろう。一行は、勇躍峠越えにかかったにちがない。

が、しかし、この日は新暦で言えば新年の一月三日に当たる。真冬である。あいにくの猛吹雪に見舞われた。峠を越すに越えられず、やむなく、行地にもう一泊となった。

大坂から丸亀に向かう船旅以外で、まるまる一日歩かなかつたのは、ここ行地での停滞だけだった。

時を経て、令和五年五月、歴史館行事「峠歩き」で、この諏訪峠を訪れた。

峠の登り口の行地で、たまたま外に出ていた住民に、かつて宿屋だった家は隣りだと教えてもらったが、面影は皆無。それでも山道に入れば、大きな盛り土の山が、道を挟んで一対。これが一里塚で、唯一古街道を偲ばせる遺跡。さてその先の峠道とはいえば、殿様街道と言われた主要道の形跡は絶無。ヤマビルの跋扈する廃道になり変わっていた。

ヒルを振り払い、藪草・倒木を切り払って何とか辿り着いた諏訪峠の頂上。そこに、大きな石碑。吉田松陰の諏訪峠越えを追想した平成四年の建立物。

松陰がこの峠を越えたのは嘉永五(一八五二)

年二月。会津から新潟へ向かう真逆のコースだったが、孫三郎たち同様、松陰も雪には難儀したという。

とはいえ、万延元年の孫三郎一行にとつて、八年前に吉田何某なる人物がここを越えたことなど、縁もゆかりもない話ではある。



諏訪峠で手を振る孫三郎の子孫 近祐治さん

全行程二五〇〇km、幾つ峠を越えたやら

孫三郎一行の全行程を地図でたどると、概算で、歩行距離は二二〇〇km、川・海の船行が三〇〇kmほどになる。

日本は山国である。これだけの距離を行くと

すれば、いったい幾つ峠を越えただろうか。

孫三郎の旅日記には、越えた峠が書いてある。名の知れた峠は、「諏訪峠」のように。名のない峠は、ただ「峠」と。このことは、名を知らずとも峠地形の山道をきちんと記録したことを表している。

そこで、あらためて旅日記の頁をめくり、峠の箇所を数えてみた。米沢街道は三十五kmほどの低山地帯に峠が十三。これからすれば、百は超えるだろうか、などと想像しながら。

ところが、数えてみると思いのほか少ない。全部で二十三。

川越えの箇所が三十で、こちらの方が多い。日本は山国というより、川国と言った方がいいのかもしれない、などという思ってしまう。

この川越えの箇所は、橋賃、舟賃、渡河賃を払った箇所、無料の橋の小さな川は数えていない。峠も、そうなのかもしれない。山道連続の中山道で、峠の記録は四箇所。余りに山道過ぎて、多少の起伏は峠とは思っていないということなのか。

そもそも、「峠」の漢字は国字、つまり日本人の創作。漢字の本国中国には「とうげ」に当たる文字がなかったという。これは、大陸の地形は広大で細かな起伏を気にしていないということも理由の一つだとか。中山道も同じことが言えるのかもしれない。

ついながら、理由のもう一つは、「峠」の語源である「たむけ」信仰の有無にもかかわっているらしいが、話が逸れるので、十三峠は多過ぎるということぐらいにして、峠の数の話は終わる。

蛇足……桜田門外の変

孫三郎一行の旅の年の大事件である。歴史マニアとしてはこれに触れずに、この年を通り過ぎるわけにはいかない。

主犯格とされる関鉄之介は、孫三郎一行が旅を終えたその年、万延二年が改元した文久元（一八六一）年十月二十日、潜伏中の湯沢温泉で捕縛された。つまり、鉄之介が国内を逃げ回っていた同じ時期に、孫三郎たちは全国回遊していたということになる。

もしどこかですれ違っていたとすれば、それだけでも面白いのだが、事件で使われた拳銃にも興味は尽きない。実物とされるものが見つかっている。和製のコピー品で、コピー元はコルト社の六連発1851年モデル。独特の機構をもっていてウエスタンマニア垂涎の銃である。

一方、かの坂本龍馬が残した（大正二年焼失）のはS&W社の五連発で1857年モデル。両者の間には銃器発達史を画す大きな違いがあるのだが、それを語るには紙面が足りない。なので残念ながら、この話はここでお終い。



コルト1851ネイビー（写真はトイ・ガン）

民具が語る生活史 ②③ ハコフイゴ(箱鞆)

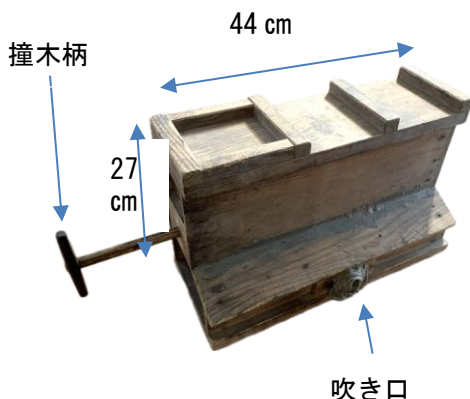
昨秋、桂のあるお宅から戦争資料の寄贈を受けました。貴重な資料を見せていただき、一息ついたことかです。ご主人が「ふいごってわかりますか」と声をかけてくださいました。そのお家から寄贈いただいたふいごがこちらです(下段、写真参照)。材は杉のようで、持ち運びできる重さです。ハコフイゴ(箱鞆)という、中世から、地域によっては明治まで使われたとされる民具です。ただ、ご主人は実際にその家で使ったものか、いつ使われたのか、何に使ったものかわからないそうです。

『日本民具辞典』によると、ふいご(鞆)は「金属の製錬・精錬・鑄造・鍛造などで、炉の火力を高めるために用いる送風装置」とされ、様々な種類があります。例えば、映画『もののけ姫』には製鉄に従事する民が登場します。タタラ場で女性たちが踏んでいるのが、「踏鞆(ふみふいご)」です。同じく『日本民具辞典』では、「…中世の絵巻物などに描かれている鞆は、ほとんどが箱の中に往復する板状のピストンを備える箱鞆(差鞆)で、金銀細工師・鍛冶屋・鑄掛(いかけ)屋・鉾山の製錬作業・石工(いしく)・木地師などが用いた」と続きます。

ハコフイゴには空気が出入りするための弁が組み込まれ、箱の内側には密着する板を直角につけた棒が差し入れられています。棒の手元につけた撞木柄(しゅもくづか)を押し引きすることで風を起こし、その風は炉側に設けた吹き口から送り出されます。実際に撞木柄を押し引きすると、吹き口からの風を感じるできます。撞木柄の動きは非常にスムーズです。このハコフイゴが他でもなく桂集落の方から寄贈されたことで、館長と私は少し高揚しました。桂はいろいろと興味を惹かれる集落です。集落西方にある阿古屋谷(あこやだに)という地名は、黄鉄鉾(おうてつこう)が風化してできた砂鉄を「赤目(あこめ)」と呼ぶことに由来していると考えられます。実際に阿古屋谷南のヤナギ

沢からはふいごの羽口が見つかっています。刀鍛冶に関わる職業としては、庄内金工の第一人者として知られる桂野赤文(かつらのせきぶん)の先祖は桂出身とされ、姓を桂野としています。また、村の文化財に指定されているカツラの木は採鉄・製鉄の神である金屋子神(かなやこがみ)に縁があります。金屋子神は桂の木に降り立たとされ、神を喜ばせるために、また神を招く依り代(よりしろ)として、製鉄を行う地にはこの木を植える習慣がありました。桂の中世の姿はどうだったのだろうか、いろいろと想像を掻き立てられる寄贈品でした。歴史館エントランスホールに展示しておりますので、ぜひご覧下さい。(神田舞子)

箱鞆(はこふいご)



参考文献 「桂」佐藤貞治2023『地学の窓から故郷(ふるさと)をみればー関川村・地球さんぽ』22世紀アート、「箱鞆」
「鞆」日本民俗学会編1997『日本民具辞典』ぎょうせい出版

方言一考・かづける

「あの人だば、人にかづけてばつかい」は「あの人」は人のせいにはかりする」という意味の方言である。「かづく(被く)」は「頭にかぶる・身に引き受ける」と意味の古語で、その他動詞がこの「かづける」、「つまり人に負わせる」という、これも古い言葉が方言に残る例である。今昔人にかづけるタイプは多く、自分にかづける人は少ないが、K氏が後者なのは、半世紀に亘って奥様に言い負かされてきたからであろう。理屈で勝てなければ黙るしかない。黙って動くしかない。週末の道の駅、菅笠を被ってゴミ袋をぶら下げ、右にふらふら左によろよると歩く姿は、そんな彼の不言実行の信念を表している。荒川台の芍薬園の草取りもそう。草が出るのは仕方ないが、出た草を取るのには時間と労力を惜しまなければ。所詮理屈で負けるなら理屈を言う手間に動くという「人生大学」卒のもっともな考え方だ。(安久)



昨年の秋の夕方、歴史館を閉めて帰ろうとすると、渡辺邸の堀の草取をするK氏を見かけた。誰に頼まれた仕事でなく、鯉だけが慌てて逃げていく。

坂井初雪の水墨画

只今開催中の「歴史館所蔵作品展」の作品についてのお話です。坂町の水墨画家坂井初雪(本名勇)さんが突然当館に来られたのは佐藤貞治先生が館長の時でした。画伯は高齢もあつてかとても小さな声で、多くを語らない方でしたので、要件が分からず館長は戸惑っていました。館長が大きい声で話しかけても直ぐに反応は無く、しばらくしてようやく寝息のように呟く声が出ます。時刻は昼過ぎ、ただでも眠い時間帯、特に館長は寝てはいけない運転中にも寝て、ゴトゴトとひどい道だと言った目を開いたら稲刈りの終わった田んぼの中を走っていたという逸話の持ち主です。それでもあまりに静かになったのでパソコンから目を離して二人の様子を窺うと、館長が首を垂れてこくりこくりと眠っていました。テーブルを隔てて座る画伯も置物のように動かず、事務室には画伯の絵のような寒々とした空気が流れました。その後画伯の企画展を何度か開催し、作品も多く寄贈していただきました。鬼籍に入られたお二人を思い出す絵画です。(安久)



「待春」坂井初雪

歴史館行事の報告

○山と花のスライド解説会

1月19日(日) 参加者16名

○古文書解読講座(1・3月)

江戸時代の村の暮らしを古文書から学んでいます! 令和7年度は4月9日(水)からスタートします。ご興味ある方ご連絡ください。

お知らせ

○村民ギャラリー「歴史館所蔵作品展」開催中

会期: 4月13日(日)、月曜休館・月曜祝日の場合は翌火曜休館、観覧無料。下関の三品優さんの油彩画、幾地出身の板越蒼龍さんの書など、村にゆかりの作家の作品を展示中です!

○令和7年度友の会会員募集 友の会募集の用紙を同封いたしました。すでに会員になってくださった方にも募集用紙が入っている場合があります。ご了承ください。

○御礼 平成10(一九九八)年に創刊されたいわかがみは、今回で百号となりました! みなさまの日ごろからのご支援・ご協力に感謝申し上げます。今度ともよろしく願っています。

いわかがみ 第百号

発行日 令和七年三月

編集発行 せきかわ歴史とみちの館

tel 0254-64-1288 Fax 0254-64-0300



(スライド解説会)